寄り添う力

茂原市立冨士見中学校　三年　池田　隼都

学校に行きたい。誰よりもそう思っているのに、私の体は言うことを聞かない。なんで起きられないの。なんで頭が割れるほど痛いの。みんなと一緒に学校に来たいのに。

みなさんは「とても行きたいのに休むしかない」という、胸が張り裂けそうなほどの悔しい思いを味わったことがありますか。

これは私が小学五年生の時に患った「起立性調節障害」という、今社会問題にもなっている病気のリアルな経験です。当時の私は学校が大好きでした。でも自分の意志とは裏腹に、朝どうしても目を覚ますことができませんでした。頭も割れるほど痛く、繰り返し襲ってくる腹痛や吐き気。ようやく起き上がれた頃にはすでに昼を過ぎている。そんな日が続きました。でも、午後になると動けるようになるこの病気の特徴が、周りに大きな誤解を与えることになってしまいました。午後からでしたが久しぶりに学校へ行けた日のことです。みんなに会える、みんなと一緒に授業を受けられるという喜びと緊張が混ざり合う中、勇気を出して教室に入りました。仲が良かった友達は駆け寄ってきてくれて、「待ってたよ」や「心配しちゃったよ」などと温かい言葉をかけてくれてとても嬉しかったです。でも遠くで聞こえてきたのは、

「あいつ……。午前中だけ休んで……。サボれていいよな。」

私は一瞬、息が止まるような衝撃を受けました。でも。目の間にいる友達を困らせたくないという思いから、引きつった笑顔でやり過ごすことしかできませんでした。心の中はショックと悔しさでいっぱいでした。「サボっているわけじゃない。みんなと同じ生活を送りたいのに。いうことを聞かない自分の体と毎日闘っていたのは私自身なのに。」午後になれば元気に見えてしまうこの病気のせ

いで、私の「行きたくても行けない」は。ただの「甘え」として片付けられてしまいました。

そんな孤独と悔しさの中で、私に手を差し伸べてくれたのは、他でもない、家族と担任の先生の存在でした。毎朝なかなか起きられない私を責めることなく、「無理しなくていいよ」と寄り添ってくれた家族、そして、仕事もある中家を訪れて、私の苦しみを理解しようと耳を傾けてくれた担任の先生がいました。「目に見えない病気」だからこそ、信じてもらえることが当時の私にとって、どれほど頑張るエネルギーになったかわかりません。周りの理解があったからこそ、私は自分自身を責めるのをやめ、少しずつでも前を向いて、体調を回復させていくことができたのです。

この経験を通して私は強く感じたことがあります。それは、世の中には見た目だけではわからない「自分にしかわからない苦しみ」と闘っている人がたくさんいるということです。私たちはつい、自分の物差しで「怠けている」「サボっている」と決めつけてしまいがちです。しかし大切なのは、目に見える姿だけで判断せず、まずはその人の背景にある苦しみを知ろうとすること、そしてお互いを思いやる心を持つことではないでしょうか。それこそが、誰もが生きやすい社会をつくる第一歩だと、私は強く訴えたいです。周りには色々な悩みを抱える人がたくさんいます。皆思いやりを持つことができれば、誰もが生きやすい、明るい社会がつくれるはずです。

最後に、今この瞬間も、周囲の誤解に傷つき、孤独な日々を過ごしている仲間へ伝えたいことがあります。あなたは決して一人じゃない。「行きたいのに行けない」というもどかしさや悔しさを分かってくれる人は絶対近くにいます。皆思いやりを持ち、目に見えない痛みに寄り添い合える優しい社会を私たちでこれからつくれたら……。一緒に寄り添う力を育てていきませんか。